出炭祝うタオルはよいが……

その蔭にあるものは

三川鉱で、二月に一本、三月に一本、出炭好調を祝う記念タオルが渡された。

「なーんか。出炭の新記録が出たちゅうのに、タオル一本か！」

「会社が出す分は、どうせおれたちのうわまえをはねた分だからもらわにゃ損たい」、などといいながら受け取ったが……

今年に入ってからの三川鉱の出炭記録はうなぎのぼりに上がり、一月十六日には一万三千六百五トンを出し、二月二十三日には、これまでの日産最高の一万四千二百二十二トンの出炭を記録した。

三池炭鉱全体のペースも一日二万トン出炭体制に乗り、いずれも会社にとっては笑いが止まらぬことであろう。

しかし、この裏には果たして何があるだろうか。

保安部で公表された分だけを見ても、一月は軽傷以上が二十二名（うち死亡一名）で、二月は軽傷以上が十名と目標を達成したものの、三月に入ってからは第二週より負傷者が急増し、十五日現在で軽傷以上八名、微傷十二名となっている。

作業をはじめるときは、必ずその作業の前チェックをしましょうとか、「ご安全に」の合言葉をぜひとも交しましょうとか調子のよい看板だけをかかげては、金のかからない、それこそ綱わたりのような毎日の保安対策ともなっているのである。

三月八日のこと、いよいよ来るものが来たな、と思わせるような運搬事故が二回も起きた。午前中に七十ループ付近で大型（二十六トン電車）の炭函が脱線。午後には八目貫付近で、二十六トン大型電車が脱線。

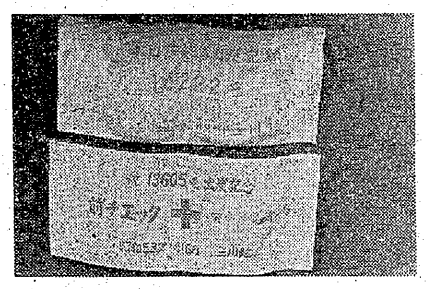
出炭記録を延ばすためのスピードアップが、会社が国からせしめている助成金ともつながっているのでは？——と疑いの目を向けたくなってくる。事故や負傷者が、このように絶えない三川鉱である。

せっかく渡される記念タオルの蔭で、働く者には作業量が多すぎての「きつか」、高温個所が多すぎて「あつか」、働いたわりには賃金がもらえず、「少なか」を押しつけるのである。

ささやかな私たちの福利、厚生要求には一顧も与えぬのではもらうタオルも血ぬられたのと同じで、会社がいわっしゃるような、汗や汚れも落ちにくいのではなかろうか……。（K記）

×

三川鉱が配った二本のタオル。やっぱりタオル一本でももらうと、悪い気持はせんからな」、とは職場の率直な声。でも、「考えて見ると、タオルに使った金を、福利要求にこたえぬところに、会社のほんとのねらいがあるなア」との声も…

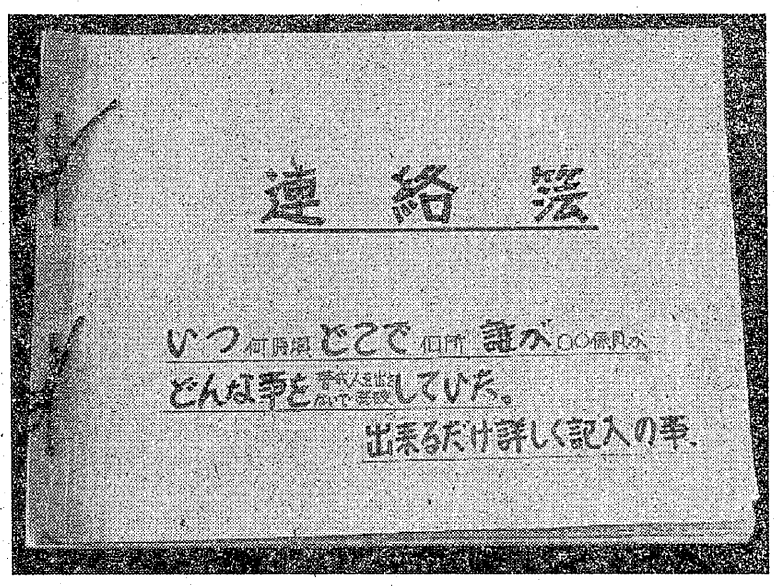


監視の目光らす連絡簿

過去に、何回となく重大災害をひき起こし、おびただしい労働者の命を奪っておきながら、今もって災害が後を絶たない三川鉱の保安管理に対し、今三川指導部が備えつけた〝連絡簿〟が監視の目を光らしている。

いつ誰が何をしたか

保安実態を余さず告発



会社の保安対策に、監視の目を光らす連絡簿。めくれば、告発されている保安不良の数々。

保安対策へ目

三川鉱（平賀哲陽鉱長）は、過去に何回となく大災害をひき起こした札つきのやまだ。

それでも、三池労組の坑内保安改善要求に対して、果たしてどれほど耳を傾けているものか。依然として、災害に事故がうち続いている。

三川指導部は今年にはいってから、十九の職場分会長会議で話し合った結果、連絡簿を備えつけた。その日その日の各職場でのできごとや、目に触れた保安上の問題点などを細大もらさず記入するのである。

その日のページさえめくれば、全職場のことが一目瞭然。どこの職場でどんなことがあったか。あるいは保安上でどんな問題点が発見されたか。ついでにその改善のためにどのように努力が払われ、どうなったか、などなどいやでもわかる仕組になっている。

指導部長や保安担当者もちゃんと捺印しなければならなくなっているから、必ずその日その日の点検を怠ってはならず。しぜんこの連絡簿を通して、三池労組員全員が、鉱の保安対策に対して監視の目を光らすことになっている。

連絡簿の誕生

三池炭鉱には、昨年宮浦鉱の三川鉱への統合、有明炭鉱の三池炭鉱への合併を中軸とした大合理化が押しだされて以来、事故や災害が打ち続いた。

同指導部では一月二十三日の職場分会長会議で話し合ったところ「保安闘争を強めなければならない」、ということになった。そのなかの具体的な対策の一つが、ほかならぬ連絡簿だったのである。

初めは大学ノートを連絡簿に使った。

ところが、それでは見るのにめんどうだ、その日その日のことがひと目でわかるものにしよう、ということになり、今の四つ切りの型（商業新聞の一ページ大）にしたのだという。なるほど一ページに全分会の報告事項が記入されることになっており、その日のページをめくりさえすれば、全分会のようすがひと目でわかる。

余さず告発

これは二月十七日の金曜日、六分会（掘進・仕繰の三交代に機械や運搬など）の記録——

「東材運本延巻立、函操作の流し信号警報ボタンの位置が、実函線と空函線（坑外揚用線）の真ん中にあり。ボタンで頭をうつので、空函線の壁側（人道側）に取りつけ直すように、岡崎主席（開発）に申し入れる」。答え「電気係に連絡し、取りつけ直すようにいいます」（報告者・平田光男）

これに対して、指導部は結果をちゃんとチェックする、ということになる。事実、「○○日、××係長に申し入れる」との指導部長の回答が、別の欄では記入されている。

とにかく「いつ」（何時頃？）「どこで」（箇所）、誰が（○○係員が）、「どんなことを」（警戒人をださないで発破）していたかを、余さず告発している連絡簿。鉱の保安対策の進行に、監視の目の届かぬはずはない。

政治を変革する〝春闘〟を

職場に強まる、要求獲得への決意

やってきた春闘に、職場から声があがり始めた。

四山指導部は、新聞を発行し始め（三月二十二日NO・一）、職場新聞が生き返った。

〝あけぼの〟（三川十八分会）は、職場の声を伝えている。

「Tさんは、雇用の確保は社会生活維持のため重要な課題であるが、この異常な世相にしたのは政府・自民党で、その責任は免れない。賃上げなくして生活なし、生活なくして労働なし、といっていますし、Sさんは、坑外勤続三十二年、四人家族で、満勤して十一万円。出炭がよかったからといって、会社は私達にタオル一枚。会社に対して怒りがこみあげるばかり。何としてでも春闘要求はかくとくしなければ、と決意を述べています」

〝あおぞら〟（三川十六分会）は——

「スケジュール闘争は、労働者の階級的団結、階級性が強化されることにならなかった。資本主義の危機は、一層深刻になり、犠牲は相変らず労働者・国民に。今こそ労働者階級に依拠して、政治を根本的に変革する以外に勝利はないと思う」

こうして、職場で春闘への決意は強まってきた。

高橋さんから寄せられた新聞

三池が忘られず……

東京　上村幸雄

漸く春めいてきました。三池労組の方々、いかがお過ごしでしょうか。

私も今春ワセダを卒業になりますが、まだ前途が決っておりません。

正直のところ私自身も財政難ですが、毎回送られてくる新聞〝みいけ〟が、タダ読みになってはいけないと、三千円送金いたします。

最近は公害裁判も、世論の強いバックアップがなければ、中途半ばな勝利しか得られない情勢です。

私は三月十二日から十七日まで自分が大学をでる記念に、三池で二年前に撮った写真展を実行しました。私の下宿の近くに住まれる都立高校の桜井秀三先生が、まっ先にかけつけて下さって有難く思いました。

裁判闘争も難かしいと思いますが、がんばって下さい。

×

上村さんのお住まいは「東京都練馬区関町二—一四三、大和アパート」です。ご厚意ありがとうございました。

情勢はきびしいが

東京　高橋賢司

遅くなりましたが、CO患者を守る会の会費をお届けします。

COヨーカンは大変好評で、品物はすぐなくなりました。

情勢のきびしさだけが強調されつつある七八春闘の中で、機関紙〝みいけ〟の迫力を、自分の職場の中に少しでも紹介し、闘いの火を広げたいと思います。

きたる十一月の大災害十五周年には、職場の仲間とともに参加すべく話し合っています。

CO患者の皆さんをはじめ、ご家族・組合員のみなさまのご健康を心から念じます。

×

高橋さんはトラック労働者まなぶ友の会で活躍され、お住いは「東京都中野区鷺宮六丁目三一番六号、第一いづみ荘一の七号」です。大変ありがとうございました。共にがんばりましょう。